アルジェリア／チャド／モロッコ／エジプト

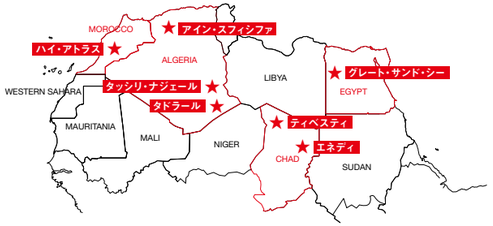
サハラに眠る美を追いかけて

**かつては草木が生い茂り、さまざまな民族や動物が行き交っていたサハラ。
砂漠と化したいまでも、先史時代の民が残してきた無数の壁画を見ることができる。
サハラの砂上で、変わりゆくもの、変わらないものを追いかけた。**

英 隆行＝写真・文
photography & text＝TAKAYUKI HANAFUSA

はなふさ・たかゆき●サハラ砂漠を撮りつづけるフォトグラファー。写真展「イヘーレン岩壁画」、「サハラに眠る先史岩壁画」（2021年開催予定）など、サハラの壁画の写真展を行う。

左ページ上／アルジェリア南部の町ジャネットに暮らすトゥアレグの女性。年に一度開かれるセベイバ祭の日、伝統衣装を纏っていた。　下／顔を犬の頭のように描くのはティベスティ山地の壁画の特徴。（チャド、ティベスティ）　右ページ／エジプト西部からリビア東部に広がるグレート・サンド・シーは、日本の国土の5分の1もある広大な砂の海。

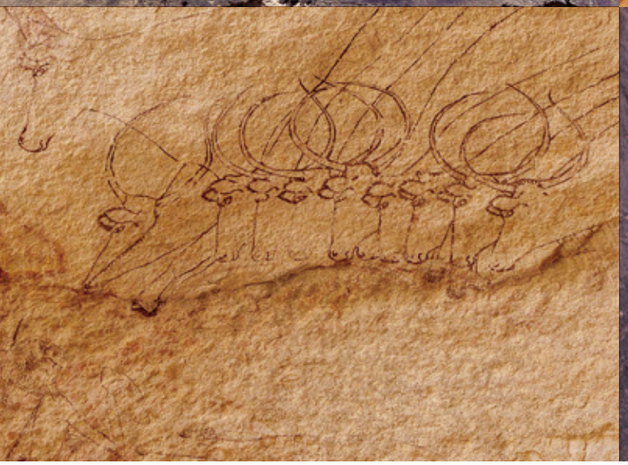


モロッコのハイ・アトラス。標高2400mのヤグール高原では、夏から秋にかけて牛や山羊の移牧が行われる。

牛はもっとも大切な家畜で、交配によって特別な毛色や模様を作ったり、角の形に手を加えていたといわれる。（チャド、ティベスティ）

ラクダが運搬手段となったのは、サハラが現在のような砂漠となった紀元前後のこと。いまでもラクダは「砂漠の船」と呼ばれる。（チャド、ティベスティ）

チャド北東部のエネディ山地で出発前のベンツのトラック。荷物と人が満載の現代版「砂漠の船」。



砂漠のミュージアムへ。

「豹から子どもを守る母親象」の壁画と出合ったのは、いまから40年前のことだ。当時、私はアルジェリア北部の町ブリダでプラント建設に携わっていた。砂漠に興味のあった私は、フランスでルノー・キャトルという小さな車を買ってアルジェリアに持ち込み、休日のたびにサハラへ出かけていたのだ。ある3月の週末、いつものように砂漠への旅を計画した。行き先はサウス・オラン地域のアイン・スフィシファ。アトラス山脈の麓、サハラの入り口にある小さな村で、砂漠に壁画があると聞いて気になっていたのだ。仕事の仲間たちととりあえず行ってみようということになった。片道約400㎞、車で往復10時間ほど。夜明け前に男4人で車に乗り込む。ブリダからアフルーの町までの360㎞は快適な舗装道路だが、そこからの30㎞はピストと呼ばれるオフロードだ。4WDではなく、車高の低い2WDでは高度な運転技術を要する。このような場面では、同僚の電気技師K君は欠かせない。アイン・スフィシファに着くと、村の子どもたちに取り囲まれる。壁画の場所を訊ねると、子どものひとりが道案内をかって出てくれた。村外れの川の近く、5〜10mほどの巨石がごろごろした岩場にたどり着く。その大きな岩の一つに線刻画が描かれていた。突然現れたその壁画に、皆が驚きの声をあげた。

それまでにも別の場所で壁画をいくつか見たことがあった。動物の姿をそのまま描いたものや単純な人物像など、上手下手はあっても心動かされるものはあまりなかった。ところが「豹から子どもを守る母親象」を見て、作者の感情が直接伝わってくるように感じられた。身をもって子を守ろうとする親の気持ちは動物も人間も変わらない。先史時代の作者もこの場面に感動して描いたのだと思えた。そして、現代の私たちが同じように感動する。時を超えた感動の共有だ。美術好きというわけでもなかった私が、先史壁画に恋をしてしまった。

先史時代の壁画が伝えるもの。

エジプト、スーダン、チャド、モロッコ、モーリタニアなど、壁画を求めて北アフリカ各地を歩きまわったが、なかでも幾度も訪れているのが、アルジェリアのタッシリ・ナジェールだ。あたりに住むトゥアレグの人びとの言葉で“川のある台地”を意味する。いまは何もない砂漠の只中にあるが、壁画が描かれていたおよそ1万年前からの8000年間は、さまざまな民族の交差点になっていた。

タッシリの壁画を見るには、台地周辺部を4WDで巡ることもできるが、台地の上は車では入れない。途中からラクダかロバに荷物を積んで歩くこととなる。どちらを選ぶかは、目的地とルート次第だ。ラクダは130㎏積んで2週間水なしで歩けるが、急峻な峠は登れない。一方のロバは50㎏しか積めず、3日に一度水を必要とするが、どんな坂道でも登ることができる。平地から700〜1000mの標高差がある峠を登ると、平坦な礫（れき）砂漠が広がっていて、ところどころに砂岩の岩塊が点在している。壁画はその岩陰に描かれている。通常、2週間ほどかけて毎日20㎞以上を歩きながら、驚くほど変化に富んだ無数の壁画を見る。題材は狩猟や牧畜など日々の生活の営みから、神か宇宙人なのか現実には存在しない得体の知れない生き物まで。描かれている人物像も、筋肉質で肌の黒い狩猟民、ほっそりして浅黒い肌の牧畜民、白人のような顔つきの牧畜民など、民族も多様だ。

タッシリのなかでもひときわ奇妙な壁画がある。「白い巨人」だ。頭に角のような突起があり、大きな力こぶと巨大な陰嚢を持った3mを超える巨人。絵の前に立つとその迫力に圧倒される。巨人の左右にはお腹の大きな妊婦が横たわり、左側には祈るような仕草の女性たちが並ぶ。受胎や安産の神だろうか。1万年前頃にタッシリに来たとされる狩猟民族によって描かれたもので、このあたりではもっとも古い時代の絵画だ。

その狩猟民族の次にタッシリにやって来たのは、6000〜7000年前頃に牛を連れて東から来た黒人系牧畜民。彼らの壁画は写実的なものが多く、膨大な数の牛が描かれている。弓矢による戦争の絵も各所で見られる題材だ。世界のどの地域でも、狩猟採集の時代では集団間の戦争を示す考古学的事実はほぼ見つかっていない。つまり戦争は、農耕や牧畜がはじまった新石器時代に生まれたとするのが、考古学者の間の通説だ。

性は民族や時代を超える人類の共通のテーマだ。チャドのティベスティにも、「愛の館」と名づけられた黒人系牧畜民による壁画が残る。そこ

左ページ 左上／「豹から子どもを守る母親象」。（アルジェリア、アイン・スフィシファ） 右上／「白い巨人」の左右にはお腹の大きな妊婦が横たわり、左側には祈る仕草をする女性たちが並ぶ。（アルジェリア、タッシリ・ナジェール） 左下／イヘーレンの岩壁画。岩の割れ目を小川に見立てて牛が水を飲む場面とした。（アルジェリア、タッシリ・ナジェール） 右下／紀元前後には壁画は退廃期となり、古代ティフィナグ文字が現れ、有史時代に入る。キリンの横に描かれるのはその古代文字。（アルジェリア、タドラール）

右ページ 左上／槍を持ち、頭を羽根で飾った戦士たちの隊列。少し離れたところには、長いスカートをはいた女性たちの姿も。（チャド、エネディ） 右上／イヘーレンの岩壁画の一部。羊を襲ったライオンを退治する人びとの絵。（アルジェリア、タッシリ・ナジェール） 左下／「戦争図」。牧畜の時代を迎えて人びとは集団間で戦争をするようになった。（アルジェリア、タッシリ・ナジェール） 右下／牛や羊が草を喰む草原の一軒家が描かれている。家の中には男女が集まり、音楽が奏でられ、酒もあるようだ。（チャド、ティベスティ）

には、牛や羊が草を喰(は)む長閑(のどか)な田園風景に、一軒の家が描かれている。家の入り口の縄暖簾をくぐると、裸の男女が集っている。女性は足を白く塗り、右端の男は何か楽器を奏でているように見える。部屋には大きな甕(かめ)もあるが、中には酒が入っているのだろうか。女や男を奪い合っているように見える場面もある。

これらのサハラ先史壁画は、王国などの権力が形成される前に描かれたもので、ある程度の専門的に絵を描く人というのはいたかもしれないが、ほとんどは普通の人びとが自発的に描いたものではないだろうか。文字のなかった先史時代の人びとの生活や精神世界を窺えるという意味で、壁画は貴重な学術資料でもある。日本の縄文時代にも土器や土偶だけでなく、タッシリのような壁画が存在していたらと想像してほしい。後期旧石器時代に隆盛を極めたヨーロッパ洞窟壁画も、新石器時代には廃れてしまった。サハラ以外にも新石器時代壁画はあるが、その質、量、多様性でほかに比肩するものはない。

サハラに見る、地球の痕跡。

地質時代の第四紀、つまり現在までの260万年間は、人類が進化を遂げてきた時代だが、氷期と間氷期が繰り返される激しい気候変動の時代でもある。いまでは荒涼としたサハラ砂漠だが、過去には何度も湿潤期と乾燥期が繰り返されている。人類の活動もその気候変動の影響を受けてきた。最終氷期が終わった1万1500年前頃から5000年前頃までは、「緑のサハラ」と呼ばれる湿潤期。その後、徐々に乾燥して、紀元頃には現在と同じ砂漠に戻った。その間、狩猟や牧畜を営むさまざまな民族が豊かな土地を求めてやって来て、乾燥化とともに立ち去った。

近年の地球温暖化の影響で、この10年でサハラでは確実に雨量が増えて遊牧民を喜ばせている。砂丘が緑の草に覆われるという見たことのない風景も目にするようになった。サハラがこのまま湿潤期に向かうかどうかはわからないが、世界の気候変動はサハラにも大きな影響を与えている。

こうして壁画を求めて砂漠を旅していて感じるのが、「サハラは地球がむき出しで見られる場所」ということだ。われわれの住む日本では、表土と植物に覆われて塵が積もっていく。逆に、砂漠では植物が絶え、表土が風に剝ぎ取られて吹き飛ばされる。海洋生物や植物の化石、人の遺した石器や土器など重いものだけが地表にそのまま残されている。また、火山活動、地殻変動、隕石落下などの痕跡もそのまま地表に見ることができる。サハラへの興味は尽きない。

砂漠に抱かれた絵画。

サハラ先史壁画は、世界遺産のタッシリ・ナジェールだけでも1万5000点以上が報告されている。サハラ全体では、この10倍以上にはなるだろう。これだけの壁画が、いったいどんな目的で描かれたのか。制作動機については、長年研究者の間で議論されてきたが結論は出ていない。狩りの成功や安産など、何かの実現を願って描いたとする説がもっともポピュラーだが、そうといえないものも多い。踊る女性や疾走する狩人など、美しいと感じ、感動したであろう場面をそのまま描写したような絵もある。つまるところ、現代人が絵を描く動機とそれほど変わらないのではないか。だからこそ、現代人が先史壁画を見て感動することができる。

政情不安やテロリスクのある地域が多いサハラ一帯は、残念ながら現在ではモロッコやモーリタニアを除いて入域が困難になった。しかし、サハラには未調査地域がまだ数多く残っていて、いまでも壁画の新発見がつづいている。

そもそもサハラになぜ何千年も前の壁画が残されているのか。それは砂漠化のおかげである。湿潤な気候では、岩陰の壁画は雨風にさらされて絵が傷ついてしまうのだ。またチャドのエネディのように、人の住む地域に近いところでは破壊される壁画もあとをたたないが、砂漠化で人が住めなくなり、人が訪れるのも困難な土地になったことは、バンダリズム（破壊行為）を避けられた大きな要因でもある。

サハラ先史壁画は、前述の通り美術的価値だけでなく、人類の足跡を示す学術資料としてもかけがえのない文化遺産であり、後世に残さなければならない。しかし、膨大な数の壁画をどうやって守るかについては課題も多い。主要な壁画をフェンスで囲う事例もあるが、量からして現実的ではないし、はたして自然のなかに人工物が設置されたときにその壁画のある風景が美しいと思えるだろうか。では、どのようにして守るか。月並みな言い方になるが、周辺の住民、内外の旅行客など、かかわりうるすべての人に、先史壁画の大切さを認識してもらう以外の方策はない。私は壁画を撮りつづけているが、写真による記録と発表がその一助となればうれしい。T

左上／アルジェリアのエル・ウエドでの検問。2013年に起きたイスラーム過激派によるテロ事件以来、テロ対策が厳しい。　右上／運転席の屋根を切り取っているのは、チャドの内戦時代に荷台に機関銃を載せて全方向に向かって撃てるようにしたため。戦争が収まったあとも庶民の足として重宝されている。左下／タッシリ台地に生える糸杉。砂漠化する2000年前より以前に根を張った木だけが生き残り、推定樹齢4000年の糸杉もある。　右下／タッシリ・ナジェールの案内をしてくれたトゥアレグの男たち。火は太古からの人類の友だ。疲れを癒やしてくれる。

上／タッシリ・ナジェールにあるイヘリールの泉。かつては遠くニジェール川に通じていたためボラのような魚も生息する。下／涙を浮かべているように見えることから「泣き牛」と呼ばれる壁画。線刻画の代表作で、面で深く彫って研磨した壁画は珍しい。（アルジェリア、タッシリ・ナジェール）